第15回みんゆう新聞感想文コンクール作品紹介

優秀賞

中学生の部

もう一つの8月9日

若松三中1年　坂本（さかもと）修吾（しゅうご）

僕の誕生日は8月9日。毎年夏休み中に誕生日が来て、今年13歳になった。8月9日が誕生日という他に特別な意味を持つ日であることを知ったのは、数年前のこと。お盆に帰っていた広野の祖母の家にかかっているカレンダーに、「長崎原爆記念日」と書いてあったのだ。広島原爆投下のことは知っていたけれど、長崎にも同じ歴史があったことを知り、そして自分の誕生日と重なっていることで、戦争についてもっと知りたいという気持ちが大きくなっていった。

8月が近づくと、新聞やニュースで戦争について取り上げられることが多くなり、戦争について考える機会も増える。この記事にある通り「終戦79年」なので、戦争は僕が生まれる66年前に終わった。遠い昔のように感じていたが、母の祖母は東京から疎開して会津に来たこと、父の祖父は戦争で片足を失くしたことなど、案外身近なところに戦争は残っているのだなと感じる。

唯一の被爆国であり、世界に平和を訴えている日本だが、世界では今も、ロシアとウクライナの戦争が続いている。そもそも、どうして戦争なんて起きるのだろうと思う。誰も得をしない、みんなつらくて苦しい思いをするだけなのに、どうして戦争になってしまうのだろう。母に聞いてみたら、

「弟とケンカした時、たたいたり蹴ったりするのはどうして？」

と聞かれて言葉に詰まった。

「話し合って解決できなくて、お互いに我慢できなくて手や足が出ちゃうんでしょう。国同士のケンカが戦争だから、それと同じじゃない。」

ケンカしてカッとなっている時にも、話し合いや、間に誰か入ってもらって解決することが大切なのだと改めて感じた。

「きょう終戦79年」というタイトルから、読む人たちはどう感じるだろう。「もう79年」なのか「まだ79年なのか」。僕は最初「もう79年」と感じたが、よくよく考えると「まだ79年」だなと思う。終戦79年ということは、爆弾や攻撃の心配なく暮らせるようになって79年ということで、そういう状態がまだまだこの先にも続いていくように、僕たちは努力していかなくてはならないと思う。

13歳になった僕が当たり前に平和な世の中に生まれて暮らしていることが、当たり前ではないということに気が付くことができた新聞記事だった。

献血の大切さ

石川義塾中1年　北野（きたの）夏帆（かほ）

みなさんは献血という言葉を聞いたことがありますか。献血とは、病気やけがなどで輸血を必要としている患者さんの命を救うためにあるもので健康な人の血液を自ら無償で提供するボランティアのことです。実際に私の身近にあるお店でも献血のバスを見かけたり家族が献血に協力するのを見たことがあります。この新聞の記事を読んだ時に今までの献血に対する自分の考え方や、献血の大切さをとても考えさせられました。

福島県では年々、献血に協力している人数がとても少なくなってきています。この10年間で献血者が約36パーセントも減少していてどの年代も減少している中、特に30代の減少が多くなっています。このまま献血の人数が減り続けてしまうと、いつか輸血が足りなくなるそうです。輸血が足りなくなるということは病気やけがで輸血を必要としている人達に血液が行き届かなくなり助かる命も助からなくなるかもしれないということになります。

私の祖母は3年前に病気で出血多量となり自分の体の血液が足りなくなり輸血をしました。その時のことを今でも祖母は知らない人の健康な血液を頂いて手術を受け元気に今いられることがとてもありがたいと言います。祖母も病気になる前は献血に協力をしていて自分の血液が少しでも誰かの役に立つならという思いだったそうです。私達家族は誰かが献血をして作られた輸血のおかげで祖母が今も元気で近くにいてくれることを、とても感謝しています。もし献血者が少なく輸血もできなかったら祖母は今頃どうなっていたんだろうと思うと怖くなりました。

私は今まで献血は大人がやること、まだ自分には関係のないことで誰かがやってくれるだろうと思っていました。でも今は健康な16歳から69歳の方に、ぜひ献血に協力して下さいと大きな声で言いたいです。私も献血ができる年齢になったら協力します。私達一人一人が少しでも献血の大切さや意味を知って理解しあえたら今よりも輸血の量も増えて、将来輸血が足りなくなることもなくなり輸血で助かる命も増えるかもしれません。一人一人ができることは小さなことかもしれないけれど、みんなで協力すれば充分な輸血の量が確保でき、輸血医療に協力ができます。数年後、献血者の人数が増えていることを願っています。

未来へ向けてバトンを引き継ぐ

福島大付中2年　長谷川（はせがわ）慶佑（けいすけ）

第二次世界大戦が終結し、今年で79年となる。僕の年齢と比べると、5倍以上の月日が経ったことになるが、これは、長い期間だったのか、あっという間の期間だったのか。戦争を経験した人々はどのように感じているのだろう。そして、今の日本、世界の状況を、どう感じているのだろうか。

今も、争いが生じている国は、決して少なくない。テレビや新聞、インターネットを通し、ロシアのウクライナへの軍事侵攻や、イスラエルとイスラム組織ハマスの衝突など、様々なニュースを日々見聞きする。画面や紙面越しに、罪のない人々が泣き崩れる姿や逃げ惑う姿を見て、その度に胸が締め付けられる。戦争を体験していない僕でさえ、そのように思うのだから、戦争を知る世代の人々は、さらに強烈に悲しさや辛さ、怒りが込み上げてくるのではないかと察する。

記事には、若い世代へ戦争をどう伝えていくかといった課題が挙げられていた。確かに、普段の生活の中で、戦争を知る機会は少ない。戦争の体験を直に聞いたり、戦争の悲惨さ、平和の尊さを改めて考えたりする機会が大切だろう。

僕自身は、この夏に、戦争に関する資料が展示されている施設を訪れた。それまで、本やニュースなどで戦争に関する話に触れることはあったが、自分自身で知る機会を得ようと思ったからだ。この記事もきっかけの一つとなった。

その施設には、命を落とした若い兵士が身に付けていた物や、家族へ宛てた手紙など様々な資料があり、僕は一つひとつ、ゆっくりと見学した。僕と年齢が近い多くの若者が戦地に行ったと思うと、正直怖さを感じ、展示されている資料を直視できないこともあったが、戦争がいかに恐ろしく、愚かなことなのかと理解し、今、何気なく過ごしている日常は、恵まれ、幸せなことなのだと気付くことが出来た。

戦後79年が経ち、戦争の記憶は消えつつあっても、戦争を経験した人々の平和への思い、願いは引き継がなければならない。戦争を知らない僕達若い世代に、そのバトンが託されている。また、僕達世代だからこそ出来る、戦争の悲惨さや平和の大切さを伝えていく方法もあるかも知れない。それを模索することも必要だ。

そして僕は、未来へ向け、日本、そして世界の平和に貢献出来る大人になりたいと思う。

高校生の部

子ども食堂とは

尚志高2年　大沼（おおぬま）浬乃（りの）

子ども食堂は、地域社会における重要な役割であると思います。特に経済的に困難な家庭や孤立した家庭の子どもたちにとって、安心して食事ができる場所としての存在は欠かせません。ですが、ただ食事を提供するだけでなく、子どもたち一人ひとりに配慮した環境づくりが求められています。このことからすべての子どもたちが心から安心して過ごせる場所を提供することができると思います。

まず、配慮した子ども食堂を広めるためには、食事の提供にとどまらず、子どもたちの個別のニーズに対応する必要があります。例えば、食物アレルギーを持つ子どもたちへの対応です。アレルギー反応は生命にかかわることもあるため子ども食堂ではメニューの見直しや調理方法の工夫、さらにはアレルギーに関する知識を持ったスタッフの育成が必要です。これにより、食事を楽しむすべての子どもたちが安全であることが確保されます。

また、文化的、宗教的な配慮も重要です。多様なバックグラウンドを持つ子どもたちが集まる子ども食堂では、ハラールやベジタリアンなどの食文化に対応するメニューの用意が求められます。これにより、どの子どもも自身の信念を尊重されつつ、楽しく食事をすることができます。このような配慮がなされることで、子どもたちの多様性が尊重され、共に過ごす場所としての子ども食堂の意義が一層高まると思います。

さらに、子ども食堂の環境づくりにも工夫が必要です。障害を持つ子どもたちが利用しやすいように、バリアフリーの施設や、視覚障害者向けの案内表示、聴覚障害者向けの手話対応など、さまざまな支援が求められます。また、発達障害や情緒障害を持つ子どもたちに対しても、静かなスペースや感覚刺激を抑えた環境を提供することで、彼らがリラックスできる空間を作り出すことができます。これらの取り組みにより、すべての子どもたちが安心して食事を楽しむことができるのです。

最後に、配慮した子ども食堂の広がりは、単に子どもたちに食事を提供する以上の意味を持っています。これは、すべての子どもが自分自身を大切にされ、尊重される社会を築くための一歩です。だからこそ、配慮した子ども食堂を全国に広める取り組みを地域社会全体で支えていくことが重要です。

AIの普及とクリエイターの権利

尚志高2年　加藤（かとう）あすか

最近、生成AIという言葉をよく目にする。IT機器を持っていれば誰でもAIを利用することができる今、AIによって様々な創作物が生み出され、色々な場所で扱われている。

だが、その生成AIの普及に伴い、多くのクリエイターの権利と尊厳が奪われている。このAIによる著作権侵害は、とても深刻で大きな問題だ。私が目にしているだけでも、大きな不満を抱く状況はたくさんある。

例えば、ネット上で生成AIを使って作られた物を自身が作った創作物として投稿し、多くの評価を得たり、お金を稼いだりしている人が多く見られる。また、自分で描いたイラストを、「AIイラストだ」と判断され、批判を受け心を痛めるクリエイターの姿も少なくない。

このように、多くのクリエイターの尊厳が、生成AIを考えなく扱う人達によって奪われている。私はこのAIの著作権侵害について、もっと重要視し、国全体で向き合っていくべき問題だと思う。

この問題に対し、文化庁が著作権法改正による規制強化に踏み込まなかった点は、著作権者を守るには不十分であると思う。まず、2018年の著作権法改正によって、権利者の許諾なしに誰でも著作物をAI学習に利用できてしまう点が大きな問題だと思う。その結果、「AI学習禁止」と呼びかけたり、自身の著作物に学習防止の細工をしたり、クリエイターが自分自身で権利を守るしかない状況に立たされている。自分がどれだけ時間や熱量を注いだ物を他人に利用されても、権利を堂々と主張できない理不尽さに、不満を抱えるクリエイターはたくさんいるだろう。

対するEUの、権利者がAIの学習利用を拒否できる制度は、著作権者を守るためにとても前向きであり、適したものだと思う。こういった海外の事例を日本でも参考にしていって欲しいと思う。

クリエイターを守るためには、もっと規制強化に踏み込んだ具体的な措置が必要だ。そして、AI技術の発達と著作権の保護の両立をしていくには、業界全体、国全体の協力が大事だと思う。皆が協力して、文化が失われることなく、クリエイターが安心して創作活動を行える環境がいち早く整えられることを願う。AIと人との適切な距離を探り、上手く活用していく方法を見つけていきたい。

隠れた魅力

学法石川高2年　出川（でがわ）綾乃（あやの）

「町」と聞くと、田舎で魅力が何もないとイメージする人も多いのではないでしょうか。私も実際そう思っていました。高校選択をしていた時、高校で入部したいと考えていた部活動が福島県に1校しかなく県外に行くか迷っていた時期がありました。県内の高校だと石川町にあり、県外は都会に学校があります。ある日、地元の人と高校についての話をしていた際に「石川町はなにもないよ」と言われました。寮生活を考えていたので、交通や買い物といったことを考えると石川町には不便なところがありました。しかし、自分自身が福島県出身ということもあり、石川町の高校を選択しました。

高校に入るまで不安で仕方がなかった高校生活ですが、いざ入学するともちろん不便なところはありましたが、町の魅力を知ることができました。それは、町の人が親切なところ、春になると川沿いの桜並木が綺麗なところ、その他にもたくさんあります。石川町で毎日生活していることで初めて町の隠れた魅力を感じることが出来ました。

この新聞記事をかいた筆者の方も会津の山奥の新鮮なお寿司屋さんと聞いてびっくりしたのだと思います。それは、新鮮なお寿司屋さんは海沿いにしかないという先入観があったからで、私も町には何も魅力がないという先入観があったのだと新聞記事を読んで感じました。筆者も私も「情報に接しない＝魅力がない」ということではないということは当たり前だと思っていましたが、無意識に自分の思い込みや偏った考え方に合致する情報ばかりを集めてしまい、それ以外の情報を排除してしまう「確証バイアス」に陥ってしまっていたのだと気づきました。

私の身の回りの人で「将来は都会に住みたい」と言っている人がたくさんいます。私もそのように思っていました。確かに都会には遊ぶところがたくさんあったり、生活に困ることがありません。みんなが口を揃えて「都会の方がいい」というのは先ほども述べたように田舎には魅力がないという先入観があるからです。それに加えて確証バイアスに陥ってしまうのでさらにそのような偏った考え方が強くなってしまうのです。

このように人間は先入観にとらわれてしまい、物事に対する「隠れた魅力」を見つけることが出来ていることが少ないということをこの新聞記事を読んで初めて知りました。先入観は誰もが持っていますが、それを捨ててみることによって新たな面白い発見があるかも知れません。機会があったらぜひやってみて下さい。